

# 上条 報告

第32号  
平成24年1月

甲州市教育委員会  
☎32-5097

新年、  
明けまして

おめでとぅございませす

昨年は、三月に予定していましたが、東日本大震災で流れてしまい、本来は六月から始まるはずの伝建保存対策調査も、震災復興のための予算編成のため、実施することができませんでした。

そんな中、十月二十九日には川崎市立日本民家園での研修会を開催することができ、大勢の方にご参加いただきました。また、上条集落のことは広く知られつつあり、各団体の視察や見学で何回か案内させていただきました。

二月か三月には、工学院大学の後藤治教授をお招きして、昨年できなかった勉強会を開催する予定です。

本紙「上条報告」も四年目に入ります。情報収集の関係上、上条の保存や伝建地区の情報以外の内容が増えてきましたが、変わらずお付き合いいただければ幸いです。

本年もよろしく  
お願いいたします

## 飛驒の里 博物館施設 飛驒民俗村

行ってきました

飛驒の里は、岐阜県高山市に所在します。伝建地区が所在する街中から、車で一〇分ほど西へ行った山裾に、飛驒地方の古民家三十棟ほどを移築し、公開しています。開村は昭和四十六年で、川崎市立日本民家園の後に整備された施設です。

飛驒でよく知られている合掌造の民家も多数移築されていますが、それ以上に多いのは、勾配の緩い、板葺き屋根の民家です。樽（くれ）葺と呼ばれるもので、薄い板材を屋根に重ね、長尺の材と平たい石で押さえています。飛驒地方とひとくくりで呼称しても、茅が手に入りやすい地域と、手に入りにくい地域と様々だったことが判ります。

その他、山に入っの作業のときにだけ利用した杣小屋や、木挽小屋など、保存の対象としなければ消えていたものや、雪国での生活に必要な不可欠なそのりのコレクションなど、民俗資料も数多く展示公開されています。



五阿弥池と民家群。

## 飛驒の里 エリア



旧若山家住宅は、旧莊川村に所在した合掌造民家で、宝暦元年（一七五二）の建築であることが判明しており、重要文化財に指定されています。たまたま屋根の小修理をしていました。屋根の片面の下半が傷んできたので、差し茅をしているところです。



旧若山家住宅の差し茅風景。



同上。屋根が大きくて大変です。

作業は五名で行っており、四名は男性で差し茅をします。女性一名は、屋根に上らず茅を整えます。屋根の葺き替えには長いままの茅を使いますが、差し茅は腐っている部分だけを替えますので、半分ほどの長さに調整して束にします。差し茅も、茅のつくろいも、寒いなか大変な作業です。



調整前の茅。穂先まで1.5mを越えます。



調整後の茅。下半分の太い方を使います。



旧新井家住宅。江戸末期のくれ葺き民家。



妻壁には次の屋根替用にくれが積みれています。

飛騨の里では、開園時から毎日囲炉裏で火を焚いています。囲炉裏から立つ煙の防虫効果について、早くから注目していたためです。四十年も続けて火を焚いているため、焚き木についてのノウハウがあり、どの囲炉裏を見ても薪を十文字に四本入れ、それが同じような燃え方、同じような煙の出方をしています。



囲炉裏の様子。

活用方法も目を引きます。重要文化財の旧吉真家では杓の製作実演をしており、隣接する旧道上家では、正月用の注連縄を四人で作っていました。屋根材として使う樽（くれ）も、旧中藪家の中で作ったものです。



杓の製作実演。販売もしています。

最後に、合掌造りの二棟を紹介します。旧西岡家には、小さな合掌が取り付いています。これは井戸のための小屋です。室内は簡素で広く、梁は「チョウナ梁」という、積雪で根元が曲がった木材を巧みに利用しています。



広く簡素な板間。建具の向こう側に囲炉裏がある生活空間があります。



雪と戦って曲がった自然木を使った、太いチョウナ梁。多くの合掌造りに見られます。



井戸小屋が張りつく妻壁を持つ旧西岡家。

旧八月一日（「ほずみ」と読みます）家は、もと寺院の庫裏として使われていたもので、寄棟の屋根の破風部分に庇と建具を入れた「鼻小屋」を持っているのが特徴です。鼻小屋は、二階の採光と換気のためのもので、甲州民家の突き上げ屋根と同じ機能をもつものです。もと寺院なので、主屋の隣に鐘楼も移築されています。



鼻小屋が付く旧八月一日（ほずみ）家。莊川式と呼ばれる寄棟の合掌形式だそうです。